

● 今年の敬老の日の集いは、いや面白かった。

9月12日（土）恒例の「五ツ又自治会敬老の日の集い」がジョイフルにおいて開催されました。午前中は大ホールで澤田邦櫻・尾形直子・小澤さと御三人による邦楽（津軽三味線・太鼓・島歌・手踊り）の観客制限なし無料のコンサート、午後は大会議室で参加者は70歳以上の対象者およそ73名ほどの会食会でした。

大ホールで催されたコンサートはなかなかのもので、聴きごたえ見ごたえあり。観客の皆さまも盛況で最後には舞台上に参加者有志20人ほどが上り、炭坑節の乱舞。尾形直子さんが炭坑節の「はらってはらって」の振りを飛ばした瞬間、「はらってが抜けてるよ」とは踊り手有志から発せられた激励の言葉。



実はこの踊りの曲目は演奏者から「東京音頭」を提案いただきましたが、五ツ又では認知度が低いため急きょ「炭坑節」にさせていただきました。尾形さんの「はらってとぼし」はそのせいです。

会食会は大会議室で開かれました。近年施設の要請で会館内の飲酒は禁止です。ビールはノンアルコールですから、宴会としては物足りないと言われております。でも中には2次会を設定している方がいらっしやいました。主催者がヤキモキすることもないようで。

演芸は今年93歳になる方の三味線と唄。親和会による川柳コント。皆さん芸達者なこと。

最後はビンゴゲームで締めました。



午前午後を通して楽しい一日でした。また来年もここで遊びましょう。この日はほかに行事が多くて参加者が少なかったかな。また来年も趣向を凝らして開催します。

● シラコバト賞をいただきます。

シラコバトとくればご存知、埼玉県の県鳥、越谷市の市鳥、国の天然記念物、埼玉県のゆるキャラ、コバトンであります。彩の国コミュニティ協議会では、住みよい地域社会の実現のために、積極的な実践活動を続けている個人及び団体の活動を顕彰し賞を贈呈しています。その賞こそシラコバト賞なのであります。

今年は五ツ又から五ツ又まつり保存会（佐藤睦晴会長）と防犯パトロール隊（石川富士夫隊長）の2団体が受賞します。ご存知の通りまつり保存会は五ツ又まつりや新春もちつき会で大いに

力を発揮して行事開催に欠くべからざる存在ですし、防犯パトロール隊は北小に通う児童の特に五ツ又交差点での安全確保に多大なるご尽力をいただいています。心からお祝い申し上げます。授賞式は11月14日（土）会場はさいたま市南区のさたま文化センターです。

授賞式の状況は次号とホームページでお知らせします。

高階地域防災訓練

11月15日、8:30~11:30、川越西中校庭にて高階地区の防災訓練が開催されます。五ツ又自治会からは役員と防犯防災部担当理事が参加します。いつ起こるともわからないことのためにご苦労なことなどと言われそうですが、一旦事が起きた場合、隣人を助けるよすがになればとの思いです。参加は自由です。試しに参加してみてもは。

GG大会はもう定番

11月の五ツ又自治会開催行事とくれば、GG大会です。樹脂のボールを木のクラブで打つ。ターゲットはホールポスト。うまく入るとチンと音がします。会場は南部公共広場で小石混じりの土のコースでゲーム環境はいかがなものか。勝利する要因として「腕」があるんでしょうね。ホールインワンを複数回出す人がいます。上手な人は勝ちます。初心者よりスコアが高いのは環境に動じない腕なんでしょうね、やっぱり。それでは初心者はつまらない、で今年は初心者にも優勝のチャンスが訪れるべく運営を考えるそうです。11月15日（日）朝9時から。

自転車事故と侮るなかれ

「赤信号みんなで渡ればこわくない」、確かビートたけしのギャグだったような。

この秋、鉄道会社各社が突然に、エスカレータの乗り方の指導をしました。「必ず手すりに掴まるように」と。その翌日、駅ではエスカレータは左列は長蛇、右側は人影なし。コンコースが大混雑でした。日本人の社会性はすごいね。その翌日は以前のごとく右歩行、左立ちに戻ってましたから1日だけの現象でしたが。

その日私は誰もいない右側に乗りました。歩かなければいいのでしょから。すると間もなく後ろからガンガンと靴を鳴らす人がいます。振り返ると私が乗るときに左側にいたオレンジ色のパーカーのお兄ちゃんが私の背後にいるのですよ。どうやら早く行けと言っているみたい。しょうがないから歩いちゃいました。その兄ちゃんは「面倒くせえ事やらせるなよ」と思っていたはず。ならば私の後につくのではなく、自ら先頭を切って欲しかったな、日本男子よ。

警察が自転車の乗り方の指導を始めたのは今年の6月1日です。この数日後、都内の交差点角で交通整理している若い巡査に自転車利用者の動向を聞いてみました。彼の周りの自転車は右側通行するは、歩道を歩行者を追い立てながら走るは違反だらけなのです。巡査いわく「誰も言うことを聞いてくれないんです」。初日はずいぶんと収まっていたましたが、数日経つとこのありさま。「赤信号みんなで渡ればこわくない」です。

でも警察がこうした方針を明らかにしたということは、一旦事故を起こした時、みんなやっていることだからという言い分は認められません。攻め込まれます。たかが自転車事故などと侮るなかれ。相手に危害を与え、刑法で有罪となると民事でも補償を免れることは難しい。先年女性を自転車で転倒させ死に至らしめたサラリーマンは裁判で4000万円の補償金を請求されました。彼は持っていたクレジットカードの保険で支払うことができましたが。小学生が起こした同様の事故では親を含めて1億円近い（次ページへ）



請求がされています。どう払いますか。

自転車事故を対象にした保険があります。自転車店で扱う保険は保険支払額が安いのですが補償額は最大100万円程度ですから軽い怪我に対応する程度の額です。これでは無理。私はこの保険を1年加入し継続しようとしたら自転車店で意味ないからと言われました。いま保険会社が乗り出して月額300～600円程度掛ければ、ものによっては1億円の補償も可能です。もし被害者が死亡したり、後遺症を残すくらいの大怪我をしたとすると個人の持ち合わせの資金では到底まかないきれぬものではありません。補償し切れないから自己破産とか逃亡とか考えない方がいいです。あとからくる報いに耐えきれぬかどうか。

なにか保険会社のコマーシャルみたいになりましたね。まっ事故を起こさないような日頃の慎重なる注意と生活を続けた方がよろしいかと。



五ツ又自主防災会 地域における防災活動の拠点

忘れがちなのが水害、反省を込めて見直し



たぶん昭和24年に来襲したカスリン台風だと思うのですが、大量の降雨により埼玉県西部の入間川、高麗川、越辺川などの堤防が決壊し、甚大な洪水被害が出ました。古老の話では砂新田あたりでは洗いざらい流されたという記憶があるそうです。

なんで高階の五ツ又あたりが入間川の洪水で被害を受けるのか、という疑問が出ます。狭山台地があって川越城がその東端、入間川は狭山台地の北側を東に流れて東端から右カーブで荒川に流れ込みます。それに対し五ツ又あたりは狭山台地の南側にある、狭山台地から見ると低地ですが、台地との間に不老川というさらに低地がある。この川が排水溝になって、入間川の水は入ってこないのではないか。そう思いたいですね。しかし、五ツ又の標高と入間川の標高を比較するとあっさり納得できます。

五ツ又あたりの標高は高く22mほど、低いところでは14mです。この差は8m。この傾斜がずっと入間市まで続いていると思ってください。入間市と五ツ又の高さを比べると40m以上の標高差があります。

入間市のどこかで入間川の堤防が決壊すると狭山台地を下り南側に流れる水があるはず。この流れは容易に五ツ又に来ます。つまり実は五ツ又は入間川水害に弱い地形にあるのです。

五ツ又の土地には掘り起こすと丸い石（川原石）が多く出ます。これは入間川の川筋であったからという話は聞きます。しかし、歴史的に入間川が五ツ又あたりを流れていたという記録は今のところ見つかりません。いまでこそ入間川は荒川の支流ですが、むかしは川越の台地を迂回して大宮から浦和をすぎ直に東京湾に流れていたようです。では川原石はどこから来たのかと言うと繰り返し襲った洪水なのではないでしょうか。入間川上流の名栗川のキャンプ場では今夏の台風などで瓦の直系20～30cmほどの石が数多く流されてカマドを作る石がなくなってしまったとの事。

川越に洪水をもたらす河川は高麗川・越辺川・入間川です。これらはいずれも改修され洪水が起きにくいようにしてありますが、近年の猛烈な降雨量に対策できているのでしょうか。今年の鬼怒川の洪水を思い起こしてください。地震には強いと言われる五ツ又ですが、水害・火災には決して安心していただける状況ではありません。

「天災は忘れたころにやってくる」はいまでも有効な言葉ですかね。死語になっていませんか。



井戸端の友 あいさつ代わりの 話のネタ

新田開発

厭離穢土、欣求浄土（下卑た江戸言葉で＝「いやな世界はまっぴらごめん、この世を浄土にしてえよな」、略して＝「平和な世界にしたい」）。これは徳川家康の旗印です。家康の本心なのか、はたまた大義名分なのかは私にはわかりませんが、家康が全国制覇して以後265年間は大きな災害や農業政策の失敗による生命を脅かす事件はあっても地域限定でした。幕府の政策により争いごとになりそうな不安要素はことごとくつぶされ、戦は起きず、戦による死者は多くありませんでした。家康の旗印は実現されたということです。

こういう環境になると世の中どうなるか。そうです、戦国時代末期から江戸時代の初めは日本の人口が増え始めました。ならば増えた人口の食料をいかに確保するかがまず求められた政策です。全国で「新田開発」が進められました。

米ができる耕地は水が必要です。さらに水を供給・排水するため傾斜が必要でした。棚田はまさにそれに適合した傾斜地です。しかし新しく開発する新田はそれまで農耕に有利な環境が得られなかった場所で作ることになります。江戸時代に入ると灌漑・土木技術が向上し、平らな土地でもわずかな角度の傾斜路が作れるようになりました。

川越藩主 松平信綱は幕府老中として江戸市内に飲料を供給する玉川上水を作りましたが、その功績から分流である上水開削を許され、玉川上水の小平から川越領内新座を経由し、志木の新河岸川に至る野火止用水を作りました。この用水は本来生活用水でしたがのちに農業用水として使われたとのこと。川越藩南部はこれで改善ですが。

ではわが高階地区はいかに。新河岸川沿岸は水は豊かです。しかし藤間や砂新田は台地で、川がない、デコボコしてるなどで、農地としてはほめられたところではありません。でも新田開発は行われました。まず川越街道旧道の東側あたりに戦国時代末期の天文年間（1532-1555）、圓西と言う医師により新田が開かれました。この圓西は寺尾城の諏訪氏の流れと言われています。どこかは確定できないのですが「圓西尻」と呼ばれる小字が江戸末期まではあったようです。次いで弘治元年（1555）、岸村の修験者、常蓮坊により常蓮坊新田が開村しました。武蔵風土記稿によると常蓮坊は本山派（天台宗）に属していたことになっていますが、修験道が幕府の政策「修験道法度」で仏教の支配下に入ったのが慶長18年（1613）、常蓮坊は慶長6年（1601）に亡くなっていますから常蓮坊は純粋な修験者だったと思います。これらの新田はこのあと亀窪村に編入されましたが、この2つの新田は砂村から来た名主、三上新右衛門が管理する土地となり「砂新田」と呼ばれました。

さて常蓮坊新田はどこにあったか。常蓮坊の末裔は今いちょう通りのあたりにお住まいの「長谷川」氏です。長谷川氏はいちょう通りと旧川越街道の交差点の角のうち3つを占めています。つまり大字砂新田あたりです。常蓮坊の墓は前はいなげやの敷地内にありましたが、区画整理でいちょう通りができたので、現在はオレンジ公園脇の地藏院の墓所に移動しまつられています。

墓石は「無縫塔」という頭と胴が丸い、寺で見かける住職の墓石タイプです。「今でもあのあたり（砂新田）を常蓮坊と言うよ」とは藤間の新井さんの話です。

常蓮坊新田については、開拓者の末裔という関係者が存在し、それを裏付ける史跡・資料があって、新編武蔵風土記稿という史書があって、近隣では今でもそう呼ばれていて、いやすごいな砂新田は。いまも長い時間の中に生きているのですよ。



砂新田の地藏院



常蓮坊の墓石

五ツ又だよりのバックナンバーは五ツ又自治会ホームページの「自治会報」でご覧いただけます。五ツ又自治会ホームページへは <http://www/itutumata.jp/> あるいは「五ツ又」で検索下さい。